

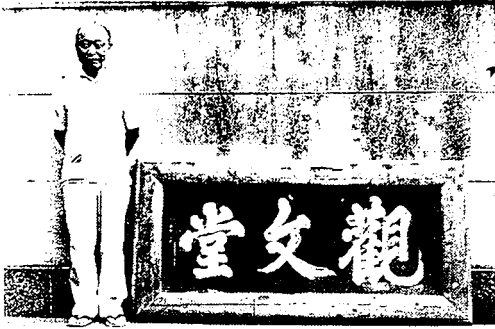
日本近世初期における渡来朝鮮人の研究：加賀藩を中心に

著者	鶴園 裕, 笠井 純一, 中野 節子, 片倉 穰
著者別表示	Tsuruzono Yutaka, Kasai Junichi, Nakano Setsuko, Katakura Minoru
雑誌名	平成2(1990)年度 科学研究費補助金 一般研究(B) 研究成果報告書
ページ	200p.+ Appendix document 22p.
発行年	1991-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/45832



〔図版〕

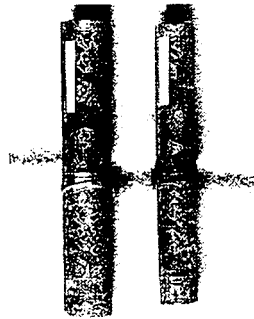
黒本稼筆 『朝鮮李東郭書 観文堂額由来記』双卷



池保氏と「観文堂」額



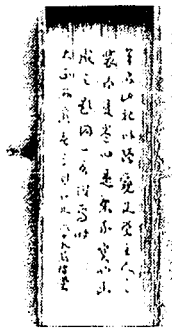
函蓋表



卷子二軸



函身外底



函蓋裏

笠片
井倉
純
一 穰(解説)
(撮影: 野矢)

以宛文世事
 書與公天瑞
 文堂之額之
 不念公之知
 伸一口可具
 之如公中之
 部之字亦
 各顯言其
 字氏為鮮
 時人未
 善公亦
 九月禮裝述
 友總之
 與之不
 室適采
 冬也
 於權之
 眼小
 內如
 可後
 前備
 可宛不
 高於
 三由天

由来記一(その1)

未難
 堂
 桑
 唐
 德
 出
 上
 呼
 家
 益
 各
 以
 大
 上
 林

由来記一(その2)

後次伊藤軍野如
 明如
 家
 此
 武
 書
 室
 亦
 職
 野
 持
 列
 堂
 所
 定
 而
 林

由来記二

〔釈文〕

〔函蓋表〕

朝鮮李東郭書

觀文文堂額由来記 双卷

〔函蓋裏〕

余書此記以贈觀文堂主人、
裝為双卷曰是余家宝也函
成乞題因一言附焉時

大正丙寅春三月廿九 六十九翁稼堂印

〔函身外底〕

〔別筆〕

「稼堂黒本植先生筆」

〔由来記一〕

印

紀觀文堂事「書賈池君揭觀」文堂之額久矣「余今茲自朝鮮」帰一日
訪君問「而始知其為東」郭之筆東郭「名礪字重叔姓」李氏朝鮮肅宗
時人才藻超凡「善書正徳辛卯」九月擢製述「官随正使趙」泰億來聘

差」室鳩巢傾」蓋如応倡和」尽權見韓客」唱和集是以」内地往々見
其誦今此額」最端整」可觀聞旧」扁於前田万」之助君字堂」者維新
之後学」堂糜市人才川」某求之以揭于」店頭君視以為」恆書林之号
者乃乞之以及」于今日蓋亦係当」時之遺跡者今也」朝鮮文華掃」地
雖覺其属」二三等者不」可得而此筆」独存君家永」揭光輝可」以伝
可以珍」也吁仰觀此」字偏察此世」蓋有不勝今」昔之感者乃」并記
所聞知」以贈于君之」大正十四年歲」次乙丑秋八月」稼堂老人

印 印

〔由来記二〕

後読伊藤辛野和韓」唱和録。則觀文堂三」字。東郭為辛野所書」也。
其問答曰。辛野。要」書觀文堂三大字。東郭」此無大筆。更任何如。」
当写呈耳。後日遂」書觀文堂三大」字。以贈辛埜。辛野」京都人。
応松雲公」聘來住者。名祐之。字」順卿。通称斎宮。辛」野博通古
矣。松雲公」就群籍有疑疑。」則必使侍臣問於辛」野。辛野一々弁
明。有」所不決。則擬議応」教。寛(元)文丙辰二月卒。」年五十六。
今写以正」前文之謬云。」稼堂老人 印

〔註〕函に書かれた文字は原本に従って改行し、『由来記一』、『由来記二』は行の変わり目ごとに「印」で示した。『由来記二』一四行目末の「疑疑」は、二字目を抹消してある。

なお、現存「観文堂」額の左端には、「朝鮮東郭」(筆者未詳)を刻した木片が付せられている。

ここに紹介するのは、金沢の生んだ高名な漢学者で第四高等学校でも教鞭を執られたことのある黒本稼堂（植、一八五八―一九三六）が、金沢の古書肆・池善書店に掲げられていた「観文堂」なる看板（額）の来歴・由来をしたためた肉筆卷子函入り二巻である。実は、一九八六年一月一日、池善書店の子孫で現当主の池保氏（池亮吉氏の長男、調布市在住）から、高岡町の旧宅を処分することになり、荷物を整理していたところ、標題の由来記が見付かったので見てほしい、との連絡を受け、早速、同月二十九日にお宅に伺い、これを拝見する僥倖に恵まれた。冒頭に掲げた写真（看板は一九八五年八月八日撮影）はその折に撮らせていただいたものである。

かつて松田甲氏は、「正徳朝鮮信使と加賀の学者」において、一七一（正徳辛卯元）年に朝鮮通信使が来日した時、加賀の儒者・伊藤幸野（スケユキ）が朝鮮の名儒・李東郭（イドンクワク）に江戸で「観文堂」（幸野の書齋・書堂名）の三大字の揮毫を懇請し、後日それを贈られたこと、幸野はこの三大字を木の版に彫りうつして扁額を作り、遺墨を書した紙片ともども、これを珍藏していたであろうこと、その後、これが池善平氏の代になって池善書店の看板として店頭に掲げられ、同書店が屋号を観文堂とも称するに至ったこと、そして、この看板「観文堂」の三大字が李東郭の遺墨を刻したものであることを発見したのは、外ならぬ稼堂であったことなどをすでに紹介していたが、加賀藩のなかの外国文化、とりわけ朝鮮文化に強い関心を持っていた

た筆者らは、（イ）この扁額が伊藤家から池善書店の手に渡るまでの経路・経緯、（ロ）同書店がこの「観文堂」を入手した時期、（ハ）肝心のこの看板と李東郭の遺墨自体の存否、存在するとすればその所在などの諸点について知りたいものだと思い、ここ一、二年の間、郷土史家などに教えを請いつつ、「観文堂」の行方を尋ね求め、関連資料の調査を行なってきた。

幸いにも、「観文堂」の看板の方は、一九八五年六月に池善書店の子孫の旧宅の倉庫に保管されていることが分かり、堅牢な額縁付きで木板に刻された、李東郭の端整な筆致を拝見し、近世における日朝善隣文化交流の一遺産が、この金沢の地にも現存することを確認することができた。ただ、扁額・看板のもとになった題簽（紙片）については、山森青硯氏の記憶によると、この書店が香林坊に移転する時、同書店に蔵されていた由であるが、残念だが、今は杳として行方知れず、である。

二

先代の池亮吉氏が「金沢で三番目に古いといわれていた書肆」と書き、保氏も「金沢で一番古いのは石井（片町）、次は近八（横安江町）、うちは三番目、とよく聞かされた」と述べたように、池善書店は、金沢で屈指の古書肆であり、また、四高生の知識と思想の源泉であったと評され、その創業から閉店までの百十余年間に、池城屋善兵衛・池善平・観文堂・観文堂書店・池善書店・池善書林等の名で数多くの図書を刊行し、漢籍を中心とする良書を江湖に送り出した。そして営業種目は、図書の出版・販売ばかりでなく、古本類

の売買、各種製本にも及んでいた。

池善書店によれば、書店の創業は一八三二（天保二）年である。

同書店刊行書のなかに、巻末の広告欄に「観文堂書店（天保二年創業）」と明記したものがあり、その創業年を特定することができる。もっとも、一九一五（大正四）年十二月一日発行の富田景周編輯『燕台風雅』をみると、この書は「創業七拾週年（じゅうしゅうねん）紀年出版」と銘打たれており、これで計算すると、一八四五（弘化）二年頃の創業ということになり、創業時期に十数年の隔たりが生じるが、ここでは上記広告欄の明記に従い、創業は一八三二年と見なしておこう。ちなみに、弘化二年は善平氏生誕の年である。これは伝聞の類だが、当初の店は、現在の片町一丁目、LABROの向かい側辺りにあった、という。

池善書店の祖先は、創業後しばらくの間、池城屋を屋号としていたらしい。亮吉氏が書いた「一中の思い出」（一九六三年頃執筆）によると、「先祖以来四代目の本屋商売を、戦争で棒に振って……」とあり、亮吉氏まで四代続いたことになっているが、筆者らが知り得た範囲では、池城屋善兵衛・池善平・池亮吉の三氏の名を知ることとどまる。保氏の書翰（一九八七年二月二十三日付）によると、池家は創業以来、初代と二代が女主人、三代が善平、四代が亮吉の各氏が続くという系統になるらしく、初代から善平氏までは血縁的親子関係がなかったということのようであるが、創業から二代目までの池城屋について、これ以上の詳細は不明である。保氏という初代あるいは二代目の女主人の配偶者が、すでに池城屋善兵衛を称していたことも十分に推測可能であるが、現時点では、それを確認づける文献資料が見出せない。いずれにせよ、いま判断しているのは、

もともと善平氏は、森下町（もりしたまち）の瀬木吉右衛門（瀬木屋）の長男であったが、一八六六（慶応二）年、戸主はやさんの養嗣子として池家に入籍し、一八八三（明治十）年、養母の死亡によりその家督を法的に相続した、ということである。池城屋が池姓を一般に名乗るようになったのは、平民への苗字使用許可（一八七〇年）からいわゆる壬申戸籍実施（一八七二年）の頃ではないかと推察され、この書店が池善書店と称するようになったのも、善平氏以後のことであろう。

南陽堂の先代・柳川昇爾氏は「文久元年池善兵衛、屋号を観文堂と称し、南町に住む。」と記し、池善兵衛なる人が観文堂と称し、南町に住むようになった年を一八六一（文久元年）と断定する書き方をしたが、南町への移転はさて置き、この年までに池家が「観文堂」を入手していたと見なすのは、後述のように疑問であろう。

善平氏の時代には、この南町三五番地で書店業が営まれたが、その場所は「尾山神社前停留場前」、現在の金沢ニューグランドホテルの向かい側であった。氏の時代に、池善書店・観文堂の名は世間に広く知れ渡るようになった。善平氏は、一九二三（大正十二）年に隠居届を出して家督を長男の亮吉氏に譲り、一九二七（昭和二年）に数えて八十三年にわたるその生涯を終えた。『北陸毎日新聞』（一九二七年九月一日付夕刊）によると、老衰のためであった。

父の隠居届提出後、家督を相続した亮吉氏は、その後約四年間、同じ南町の地で営業していたが、一九二七（昭和二年）、より正確には善平氏の亡くなる数か月前のようだが、香林坊、すなわち旧石浦町七七番地、日本銀行金沢支店に向かって左隣四軒目、現在の香林

坊109の地所に移転し、書店業を続けた。しかし、一九四三（昭和十八）年の末になると、転業のため「先祖以来百年余り続けた商売」に終止符を打ち、ついに閉店という仕儀となった。価格等統制令（一九三九年）、太平洋戦争の勃発（一九四一年）という悪状況のなかで、良書の出版、古書の正当な販売が不可能になってきたことが廃業の原因に数えられよう。亮吉氏の「池善書店閉店の辞」（昭和十八年十一月十二日付）には、来月十日頃閉店の予定、と記されていた。

閉店後、池家の人たちは高岡町に居を構えていたが、亮吉氏の没後（一九六六年没、満七十歳）、しだいに金沢の地を離れ、ただ亮吉氏の妻・美先さんだけが、金沢を離れたいということで高岡町に住んでいた。しかし、病気が高じて上京した後は、住み慣れた家も空家同然となり、この旧宅も昨年の冬に処分された、と聞き及んでいる。件の由緒ある看板「観文堂」は、閉店後、この高岡町の旧宅の倉庫のなかで世間の目に触れることもなく眠っていたのである。

三

ところで、『朝鮮李東郭書・観文堂額由来記』であるが、これは、黒本稼堂の流麗な墨書を二巻の巻軸装丁函入りに仕立てたものである。木函の蓋の表と裏に書かれた、稼堂直筆の函書きに目をやると、稼堂から贈られた「観文堂」の由来に関する二通の文を家宝として愛蔵するため、観文堂主人が函入り巻軸に装丁し、重ねて題を請い、仕上げたものであることが書き記されている。両文を一読すれば明らかかなように、稼堂が観文堂主人の懇望により函書きしたのは、由

来記の最初の一文を草した時（一九二五年秋八月）から数えて七か月後の一九二六（大正丙寅）十五年春三月二十九日のことであった。当時の観文堂、すなわち池善書店の店主が亮吉氏であったことは、前述の通りである。

由来記双巻のうち、一九二五（大正乙丑）十四年秋八月付の文章には、朝鮮より帰国後の稼堂が一日、池善書店を訪れ、久しく同書店に掲げられていた「観文堂」なる看板（額）の文字が、実は正徳時の朝鮮通信使に随行した製述官・李東郭の揮毫になるものであることを、はじめて知ったことが記されている。文中にみえる趙泰億チョ・テイルは正徳時通信使の正使（上使）であり、同じく池君とあるのは、その当時の書店主を指すのであれば亮吉氏のことであろう。この時点では、この看板の由来が室鳩巢と李東郭の交流に由来すると述べるにとどまり、これに伊藤幸野が当事者として深く関係していた史実までは解明されていなかった。

当の由来記のなかでもっとも注目に値するのは、この看板が池善書店の手に渡るまでの経緯が書き記されていることである。いまとなつては、これは貴重な参考資料といえよう。おそらく、善平氏その他のから聞知した情報を中心であろうが、稼堂の記載によると、この看板は、藩政時代のある時期から前田万之助の学堂にあったが、維新後、同学堂が廃せられると、市人の才川某の店頭に掲げられるようになった。これを池善書店の先代が書林の号として意を満たすものと考えて才川某より求め、今日に至った、という。稼堂、そして善平氏によるかぎり、池善書店が「観文堂」を入手し、それを店頭に掲げたのは明治維新直後ということになり、文久元年、南町移

転と同時に観文堂を屋号としたと解するのは疑問であろう。山森氏が紹介された、欽定四経題簽板木の明治庚戌（一八七四年）初秋の撰文に「観文堂主人池翁」とあり、遅くとも一八七四（明治七）年までに、この書店が「観文堂」を手に入れていたことは間違いない。

前掲由来記に登場する人物のことであるが、一時、この「観文堂」を蔵した前田万之助は、『先祖由緒并一類附帳』（一八七〇年、前

田瞬一、金沢市立図書館所蔵、加越能文庫）にみえる知故（トモツネ

土辞彙）には知故とある）、通称万之助を指すのではなからうか。

彼は、一八三二（天保三年）に六千石を襲ぎ、寺社奉行を経て一八三六（同七）年に御家老、ついで御用加判に任ぜられた藩臣（一八六八年没）であった。また、市人の才川某は当時、古道具屋を業としていた人物であり、これも山森氏の話だか、彼は池善書店の近所で営業していた、という。

別の巻軸に収められた文章（由来記）は、さきに書かれた由来記の補正にあたる。その後、稼堂は伊藤幸野の『和韓唱和録』（『正徳和韓唱和録』一七二一年、金沢市立図書館所蔵）を読み、この「観文堂」の三大字は、李東郭が幸野の懇請に応じて揮毫し、贈ったものであるという新史実を発見した。ここには同書の当該部分が、「明日」という二語を除き、そのまま転記され、次いで幸野の人物と学識などが略述されている。観文堂は幸野の書齋・書室名であった。こうして稼堂は、この看板が金沢と朝鮮の両学者の交流に端を発し、朝鮮通信使が日本にもたらした一文化遺産であることを確認したのである。なお、この文章には稼堂の落款はみえるが、その日付は明記されていない。だが、乙丑秋八月以後、丙寅春三月以前の

間にこの一文が書き記されたことは、論を俟たないであろう。

以上、標題の由来記について、その看板の来歴・由来を中心に紹介してみた。これにより、この「観文堂」という名の看板が正徳時における日朝学者の文化交流の一所産であり、その後、伊藤家から直接、前田万之助に渡ったのか、あるいは誰かの手を経て万之助に転じたのか不詳だが、いずれにせよ、万之助から才川某の手に移り、維新直後に南町の池善書店の店頭に掲げられるに至った歴史的経緯を知ることができ、この意味で、この由来記は、かかる経緯を後世の人たちに教えてくれる、価値のある資料である。

四

近世において日朝交隣に重要な役割を演じた朝鮮通信使の訪日は、幕府・大名はもとより、町人・百姓に至るまで異常な関心の的であった。とりわけ、日本の儒者や文人たちは、沿道の客館（宿舎）に馳せ参じ、互いに競って漢詩の唱酬に励み、書画の揮毫を要請し、筆談を通して歓を尽くした。正徳時の通信使来日に際しては、金沢からは稲生若水（稲若水、義）、伊藤幸野、青地俊新（礼幹）、坂井順元（良正）、河島南楼（正郷）が相国寺慈照院祖縁上人の仲立ちで大坂・京都に出向き、李東郭等としばしば筆談唱和した。なかでも幸野は、大坂から江戸までの往復に通信使と同行し、その間、江戸で李東郭に対し、問題の観文堂を一紙に大書せんことを懇請し、後日これを贈呈されたのであった。

日朝文化交流の証であり、幾星霜の間、金沢の先人たちが仰ぎみてきた「観文堂」は、いま涌波の某所に保管されている。

これは「観文堂」に関する、つたない中間報告にすぎないが、起稿に当たり、山森青硯・岡田一男・時野谷勝・池保・村田路人の諸氏から、数々の教示、懇篤な助言を賜うことができ、金沢市立図書館・石川県立図書館においては、貴重な文献の閲覧に格別の配慮を頂いた。ご厚志に対し心からお礼を申し上げます。また代々、この看板と由来記を宝蔵されてきた池家の方々に敬意を表すとともに、これらの大切な遺産の公表を快諾された池保氏に重ねて感謝を申し述べらる。

〔主要参考文献〕

- (1) 松田甲「正徳朝鮮信使と加賀の学者」(『統日鮮史話』第二編、一九三二年、朝鮮総督府、一九七六年、原書房)。
- (2) 柳川昇爾「藩政時代の郷土の書林」(『せゝらぎ』金沢市各校下親交録、第二集、好文社、一九五八年)。
- (3) 宮川成一「郷土の書肆と主な刊行物」(『石川郷土史学会々々誌』創刊号、一九六八年)。
- (4) 山森青硯「『加賀国学蔵板』印に就いて」(青硯文庫、一九六八年)。
- (5) 岡田一男「池さんと私」(『金沢大学教養部報』第八号、一九七四年)。
- (6) 池保「『池さんと私』を読んで」(一九七四年)。

(金沢大学附属図書館『こだま』第八五号、一九八七年四月、から転載)